

# 金髪

やまゆり

## 金髪

---

疲れた。

帰ってきて、玄関に置いてある鏡を見ると、いつも通りやつれたわたしが映ってる。

いつまでも続くわけじゃないと、あの会社で思い続けて働き続けて、もう八年になる。

じゃあ、いつまで働けばいいのか。それが全然見えてこないでいるくせに、毎日そう思っているのだ。もう、慣れたけど。

わたしは金髪である。ちなみに天然パーマである。

梅雨の時期が、わたしは好きだ。肩くらいまである金髪が、湿気でふわんとふくらむ。

空気がはいて、風に揺れる。わたしの正義。

金髪が許される会社で良かった。というか、そういう会社を選んだ。アパレルである。

別にひとに言うほどでもない大学を出た後、全国にチェーン店のあるこの就職した。初めはふつうに東京のとある店で働いたが、今は、そこらじゅうを飛び回っているいろんな店を取りまとめることをしている。

わたしの彼は、わたしの金髪が好きだと、言ってくれる。わたしはそれが泣くほどにうれしい。

わたしにとって金髪は、生きているあかしでもある。

それは、突然にやってきた。

なんと彼がわたしにまさかのプロポーズ。まさに、夢がかなった。もう、これで、

だって絶対、しあわせになれるじゃないか、もういらぬ、仕事もいらぬ、

なんもいらぬ、彼とつつましく生活をするだけ。

だと思ってたのに。

彼の母が、わたしに金髪をやめてほしいと、懇願。

なんで？答えはすぐに分かった。とにかく、金髪が嫌いなのだという。生理的に受けつけないのだという。

ウソでしょう。チャラチャラしてるって何。こわいって何。人格を疑うって、何。

そちら様の人格を疑うよ、なんて言えない。もういやになる。

それでも彼と一緒にいたい。でも金髪をやめることができない。

つらいつらいつらい。

一週間、泣いて過ごす。

黒い髪になったわたしは、もう、もぬけの殻になっていた。

何年間も、必死に生きてきたことがウソのように思えた。

なみだは、枯れた。わたしはわたしじゃなくなった。

彼はほんとうに心配してくれたけど、だめだった。

わたしにとって金髪とは、強さ。正しさ。やっと見つけられた、わたしらしさだった。

それをやめるということは、わたしという人間を、やめることだった。

あら、きれいな髪になったじゃない。

彼の母はわたしをほめた。しぬほど悔しかった。

なんでこんな思いまでして。

わたしは、わたしを守らなくてはいけない。

発作的に「うるさい」と口走った。

わたしは、わたしを認めてほしかった。

ただそれだけだった。

彼の実家を飛び出して、走った。どうしても、どうしても、

わたしはわたしを取り戻さねばならぬと、思った。

自分の部屋に戻って、ドラッグストアで買った安いヘアカラーで、

髪も、涙で顔もぐちゃぐちゃにしながら金髪にした。

彼は、わたしにとっても謝り、もう一度やり直そうと言ってきた。おふくろとは、話をつけるから、絶対に、きみをたいせつにするから。

そこまで言われると、わたしも落ち着いて頭を働かすことができた。

彼を愛している、彼もわたしを愛している。

この事実は、奇跡のようなことで、それは、とても尊いことだとも理解できる。

しあわせって、こういうものなのかな。

なにかを失いそうで、それでも、生きていくっていうこと。

しあわせって、あやういんだね、けっこう。

そう言って彼に微笑んだ。久しぶりに、笑った。

ぼくが、それを忘れさせる。しあわせとか、ふしあわせとか、

考えられなくなるくらい、愛するよ。

ありがとう。

泣きながら、笑った。いつまでもこの瞬間を忘れない、と思った。

わたしはとっても満ち、そして金色の髪はここちよく、きれいに光って揺れた。